保護者や地域と一体となった体験活動の充実による子どもたちの学びを深める教育活動の推進

岡山市立小串小学校

1 はじめに

本校は、岡山市の東南端の児島湾及び瀬戸内海を望む半島部に位置し、目の前に青い海が広がる全校児童34名の小規模校です。地域の方は、100年以上の伝統をもつ本校に深い愛情をもち、学校への協力は惜しまないといった「地域力」があります。

2 取組の概要

（1）本校の特色あるカリキュラム

本校は小規模校のため、児童が様々な人間関係の中でコミュニケーション力を育んだり、学習活動に広がりや深まりをもたせたりすることがむずかしい環境にあります。そこで、歴代校長、教職員が、校内のみではなく「地元の人・物・こと・心」を様々な形で生かし教育効果を上げることに取り組んできました。その結果、総合的な学習の時間を核として、地域の里海での体験活動『つぼ網・のりすき体験学習、海の清掃活動、アマモ再生学習』のカリキュラムができあがりました。そこに流れている理念は、「海や地域の人と関わりながら、地域のためにできることを実践できる児童の育成」です。

つぼ網体験学習というのは、地域の伝統的漁法を体験し、獲れた魚を3枚におろすなどの学習です。のりすき体験学習というのは、近年、小串の漁業で「のり」が地場産物となっていることを受けて、小串の海で育ったのりを使い、昔ながらの方法で板のりを作る学習です。

海の清掃活動は、海に関係する諸団体と協力し、保護者も交えて児島湾を船の上から清掃する活動と中学校区全体で小・中学生が共に取り組む海岸清掃の二つがあります。

伝統的漁法「つぼ網体験学習」

アマモ再生学習とは、海のゆりかご「アマモ」を育て、海に植え付ける環境学習です。ゲストティーチャーや関係団体、漁協の多大な協力をいただきます。

アマモ再生学習（10月 アマモの種の植え付け）

なお、平成24年度からは、沿岸部と山間部の学校の特徴を生かしながら、吉井川を繋がりとして、西粟倉小学校と新たな交流も生まれてきています。

（2）特色ある教育活動を全面的に支える保護者・地域

これらの活動は、地域や保護者の全面的な協力を得て成立しています。また、関係諸団体の協力が必要な活動もあります。大勢の方が様々な場面で毎年、快く協力・支援してくださいます。しかも、年を経るにつれ、海にまつわる教育活動は減るどころか増えてきています。まさに、特色あるカリキュラムは、学校・保護者・地域が一体となり体験活動を充実させ、児童の成長を協働して育んできた証といえます。

3 おわりに

こうした取組により児童は、目的意識を持って体験学習に取り組み、自分の思いや意見を積極的に発表すると共に、振り返りを通して体験したことを整理したり、他教科と関連させたりして、学びを深めることができるようになってきています。また、地域に愛着をもち、地域の方の愛情を感じながら育っています。自身も地域の一員として考え活動できるように育ってきていることは大きな成果と言えます。

また、学校全体でＥＳＤの視点から一連の教育活動を改めて見直しました。その結果、「小串ならでは」の活動と位置づけ、その教育的価値を大切にして、体験のよさを生かしながら、より児童の表現力、思考力育成に力を入れて前に進もうと確認しています。

（校長　難波　祝子）

学校全体の徹底した取組と、家庭・地域との連携による学力向上の取組

浅口市立金光小学校

1　はじめに

本校の児童は、学習習慣が身に付いている児童が多く、規範意識が高い児童も多いです。教科の学習では、国語科「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が苦手な児童がやや多くなっています。また、スマートフォンで通話やメール、インターネットをする児童が若干多い傾向にあります。

このような実態から「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」「他とかかわり合う場の設定」「学習基盤づくりを確立するための規律の徹底」「家庭や地域との連携・協力」の6本の柱をたて、児童の学力向上を図ることにしました。

2　具体的取組

（1）基礎的・基本的な知識・技能の習得

各学年の苦手とする領域の基礎的・基本的な学習に取り組みました。また、タブレット端末を使って、より難しい問題や興味のある内容のプリントを選び、繰り返し問題を解く個人学習にも取り組みました。

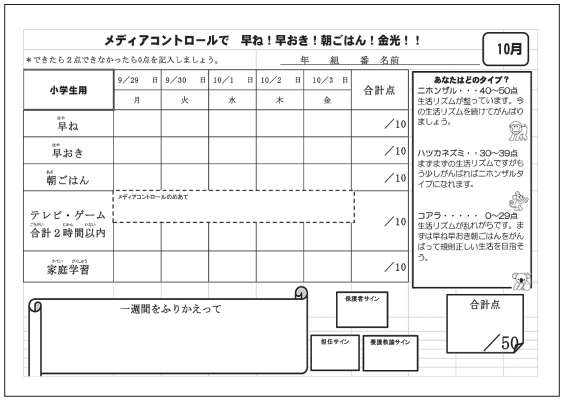
（2）学習意欲の向上や学習習慣の確立

自主学習のためのプリント「チャレンジプリント」を教室や廊下に置き、様々な教科のプリントを児童自ら選び、学校や家庭での自主学習の時に取り組みました。また、本校オリジナルの自主学習ノートを作成し、児童・教員ともに自主学習に対する意識をより高める取組もしました。

チャレンジプリントとオリジナル自主学習ノート

（3）家庭や地域との連携・協力

生活リズムの定着を目指して、町内の中学校区5校で生活習慣改善のためのチェック表の取組を行っています。学級指導・児童集会・教育講演会でメディアコントロールについての指導も行いました。また、学校支援ボランティアを推進し、昨年度は、186回、延べ617名の御協力をいただきました。



生活習慣改善のためのチェック表

3　成果

①たしかめテストの実施、チャレンジタイムの新設、ＩＣＴ機器の活用への取組によって、基礎的な学習内容の定着が進みました。

②チャレンジプリントやオリジナル自主学習ノート作成の取組によって、多くの児童に学習意欲の向上が見られました。

③メディアとのかかわりについて家庭との連携が進み、生活習慣を改善しようという児童の意識が向上しました。学校支援ボランティアの推進により、「保護者や地域の協力を得て、特色ある活動をしている。」と評価する保護者が増えました。

4　おわりに

教職員が一丸となり、「チーム金小」として学力向上への取組を進めることができました。今後は特に、タブレット端末を中心としたＩＣＴ活用、家庭・地域との連携によるメディアコントロールの推進、教師の授業力のさらなる向上を進めていこうと考えています。

引き続き、知・徳・体の調和のある成長を目指して研究を進め、遙南っ子を育てる確かな学びを推進していきます。（校長　佐々野　信治）

落ち着いた学校づくりを基盤とした学力向上の取組

勝央町立勝間田小学校

1　はじめに

本校は、県北の町村部では規模の大きい学校であり、現在も児童数は増加傾向です。児童数や学級増に伴い、不登校等の生徒指導上の諸課題が顕在化するようになりました。さらに、学力・学習状況調査の結果からも、課題が散見されました。

学校の課題を改善するためには、学校教育の基盤となる「落ち着いた学校づくり」が何より大切であり、学校組織としての力が問われていると感じていました。「落ち着いた学校づくり」を具現化するとともに、学力向上に学校組織として向き合い、学校全体で課題改善に向けて取り組んできました。

2　落ち着いた学校づくり

「落ち着いた学校づくり」のために、学習規律や生活規律の徹底と、規範意識の醸成に取り組みました。

それと並行して、特別な支援を必要とする子どもたちが、落ち着いた学校生活を送れるように、特別支援教育の充実や児童の居場所づくり、学習環境の整備、授業の構造化等に学校全体で取り組んでいます。

3　学力向上の取組

学力向上に向け、最初に取り組んだのは各種調査をもとにした現状分析と課題の把握です。分析からは、下学年の学習内容の定着不足、応用問題の解答時間の不足、週末の家庭学習時間の不足、表現活動の苦手さなど、本校が取り組むべき課題が浮かび上がってきました。

このように、学校の課題を明らかにすることで、課題に焦点化した改善策を策定できたと考えています。次に取組の概要を紹介します。

（1）朝学習

全ての学級で、毎朝10分程度の時間を確保しています。各種調査結果をもとに、下学年の学習内容で定着が不十分な事項を繰り返し学習することにより、基礎・基本の定着を図っています。

（2）放課後補充学習

学年によって確保する時間に差はありますが、日課表に位置付けて取り組んでいます。高学年では週1時間程度の時間を確保しています。学習内容は、応用問題の解答時間の不足に対応するため、県の「到達度確認テスト」の下学年の問題に取り組んでいます。

真剣に取り組む放課後補充学習

（3）校内研究による授業改善

国語科「単元を貫く言語活動」についての校内研究をスタートして3年目となります。本校の課題であった表現活動の苦手さを改善するためには有効であったと考えています。継続的な外部講師の招聘（しょうへい）が研究の蓄積となり、毎年の発表会に向けた先行授業の実施や指導案検討などが、授業改善に結びついています。

公開授業発表会での講演会

（4）ＰＴＡと連携した取組

家庭学習時間の確保に向け、ＰＴＡと連携し、「家庭学習がんばりカード」の取組を行いました。家庭も巻き込んだ取組となったおかげで、家庭学習への意識付けになりました。

4　成果と課題

学校が落ち着くことで、教師が子どもと向き合う時間が増えたと実感しています。さらに、課題に焦点化した取組により、ＰＤＣＡサイクルを機能させることができました。

何よりも、学力向上に学校組織として向き合い、教員集団が一丸となって取り組んだ課題改善が実を結んだことこそが、教員にとってのかけがえのない財産になりました。

5　おわりに

落ち着いた学校づくりを実現するために、職員全員で目標を共有し、学校全体の取組とするとともに、日々の小さな積み重ねを重視した指導の徹底が成果につながりました。

これらのことは、決して特別なことではなく、目の前にある課題を改善するという当たり前のことを確実にやり遂げた結果と考えています。

まだまだ解決すべき課題は多く、今後も教員集団が一丸となって学校課題の改善に取り組んでまいります。

（校長　森本　宏伸）

落ち着いた学校づくりを目指した取組

倉敷市立玉島西中学校

1　はじめに

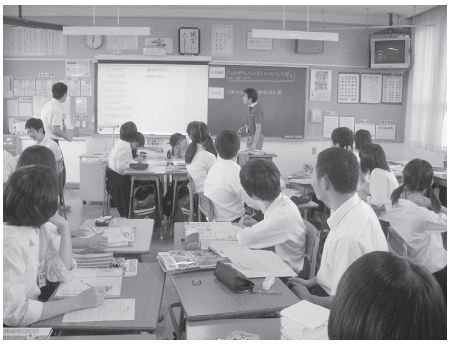
本校は、生徒が規律を守り、真剣に学習に向かっていること、部活動を一生懸命頑張っていること、教職員と生徒との信頼関係が築かれていること、また、ＰＴＡや地域の方が協力的で、学校の応援団になっていることなど、落ち着いた学校づくりを目指した取組が認められ、「頑張る学校応援事業」の優良実践校に選ばれました。まことに光栄なことであり、とてもありがたく思います。

2　落ち着いた学校づくりの取組

(1)思考力・判断力・表現力の育成

まず、教職員が一丸となって、授業を大事にすること、落ち着いた学習環境を整えることに力を注ぎました。研究主題を「思考力・判断力・表現力の育成」として、確かな学力の習得に真摯に取り組みました。全教員による校内研究授業を行い、「思考力・判断力・表現力」の課題をいつ取り入れ、何をどう考えさせるかを研修しました。深い教材研究、資料の量的・質的充実、興味を引くヒント、付箋やホワイトボードの活用、ワークシートの工夫、ＩＣＴの活用、「学習課題」「まとめ」「振り返り」の提示、分かりやすく丁寧な板書、ペア学習やグループ学習、学級全体の『学び合い』、生徒による発表や説明、まとめなど、たくさんの工夫がありました。そして何より、先生と生徒たちとの良い関係が伝わってまいりました。

また、毎週月曜日の朝学習に、全学級で読解力問題に取り組みました。全校生徒が文章や図表を根気強く読み、自由記述に挑戦する姿はとても頼もしいものでした。



「思考力・判断力・表現力」を育成する授業

(2)全校歌声発表会

学年ごとに平日に行っていた歌声発表会を、平成25年度から全校で行うことにしました。9月の土曜日に玉島文化センターを会場にしたところ、保護者や家族の大勢のご参観をいただきました。生徒の歌声は感動的で甲乙付けがたく、平成25年度には、教職員の合唱とお母さん方の有志による女性コーラス、平成26年度には3年生全員によるステージが感動の輪を広げました。

「全校歌声発表会」３年生全員による合唱

3　成果

本校の職員室は和やかで、「チーム玉西」を合い言葉に、組織としてよりよい学校づくりを目指す気運があります。授業改善はもとより、部活動の指導も熱心です。不登校や課題のある生徒もおりますが、それぞれ担任や教職員とあたたかい絆でつながり、改善が見られます。生徒一人一人を大事にしているので、生徒が自然体でいられる安心感があるのでしょう。生徒と教職員の関係が近いのも本校の自慢の一つです。

応援費の一部を使って、松本市壽氏の『良寛　旅と人生』の本を生徒と教職員全員に贈りました。良寛さんが修行した円通寺が本校の学区にあり、良寛さんは、玉島に生きる人の心の拠り所になっているのです。「人を愛すること」「自然を愛すること」「『愛語』を実践すること」。良寛さんの教えを共有することができました。

4　終わりに

平成26年3月、第67期の卒業生が、中学校生活と卒業をテーマにしたオリジナルソング「らしさ」を作りました。ふるさと玉島の大きな自然に包まれてこの学校で過ごし、人生の壁を仲間とともに乗り越えて、卒業の日を迎えたという喜びと感謝のメッセージです。3月31日の山陽新聞『滴一滴』に、「巣立ちの日、自らの言葉を涙とともに歌った経験は、かけがえのない宝物になるだろう」と紹介されました。

一人一人の「らしさ」を大切に、一人一人を輝かせながら育てることを玉島西中学校の教育の原点として、これからも生徒たちの自分さがし、自分づくりの旅を応援してまいりたいと思います。

（前年度校長　市坡　よし子）

学校を取り巻く環境改善・授業改善と生徒意識の向上による学校改革

赤磐市立高陽中学校

1　はじめに

平成25年、私は高陽中学校に18年ぶりに赴任しました。全校の約4分の1の家庭が就学援助を受けるなど経済的に厳しい状況で、以前に比べ格差が広がっていることを感じました。問題行動も厳しさを増しており、原因は学力や人間関係への不安、自己有用感の低さにあると、アンケート結果からわかりました。

そこで、①地域との連携　②授業の改善　③生徒の自治活動の推進、の3点を重点にかかげ学校改革を目指しました。

2　取組

①地域との連携

人間関係づくりの未熟さを解消するために、学校支援ボランティアと生徒が接する六つの場面を設定しました（表参照）。

②授業の改善

学力への不安が自己有用感の育成を疎外していると考え、どの生徒にもわかりやすい授業を目指しました。そのために、特別支援教育の視点を生かした次の「授業5か条」を定め、全教員で実施しました。

- 授業のめあて（できれば成果目標）の明示
- スケジュールの明示
- 振り返りの実行
- 2種類の教材準備（基本問題と発展問題）
- 視覚支援または協同学習（教え合い学習）の実施

平成26年度　学校支援活動

取　組	実施回数	参　加生徒数	参加ボランティア数
放課後学習支援活動	14	154	121
土曜学習支援活動	8	80	56
夏休み学習支援活動	4	57	41
環境整備活動	3	56	22
心を磨くトイレ掃除	3	195	39
読み聞かせ	5	全校	65

③生徒の自治活動の推進

携帯電話やスマホの校内持込が問題行動の原因の一つとの認識に立ち、校内からの追放運動を実施しました。「ルールは自分たちで決めて守る」という校風を引き継ぎ、生徒有志による委員会がルールを決めたり、追放推進大会を行ったりしました。

推進大会では保護者全員が「持ち込みはさせない」と誓約書を提出し、この活動を応援しました。

さらに、携帯・スマホの問題を小学生にも知らせようと、学区の小学校4～6年生のクラスで出前授業を行いました。

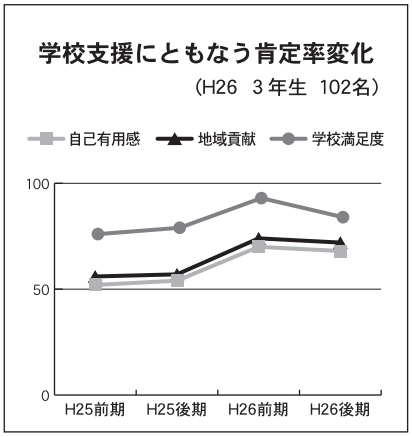
小学校への出前授業

3　成果

生徒を対象に、学校評価アンケートを年2回実施し、「地域貢献度」や「自己有用感」、「学校満足度」について、その推移を調べました。

地域との連携で学校支援活動が活発になり、授業改善が進むにつれ、「自己有用感」や「地域貢献度」、「学校満足度」などが緩やかですが上昇しました。（グラフ参照）

学習支援活動や環境整備活動に50％以上参加し、携帯・スマホ校内持込追放委員など自治活動に積極的に参加した生徒は、そうでない生徒に比べ、自己有用感の上昇に有意差が見られ、3年生の高校受験についても、良好な結果を得ました。



4　今後の取組

昨年から、高陽中学校区の地域運営協議会を開催しています。これは学期に1度、学区内小中学校長と学校支援コーディネーター、学校支援実行委員、有識者が集まり、学校支援の考え方や学習支援のあり方などを中心に話し合うものです。学区の教育に関心のある人たちが集まり、その方向性について話し合うことで、「地域の子は地域で育てる」意識がずいぶん向上しました。こうした取組をさらに進展させ、子どもが夢を実現できる学区にしたいと思います。

（校長　平田　俊治）